

各地で話題の病害虫

インゲンテントウ

学名: *Epilachna varivestis* Mulsant

英名: Mexican bean beetle

本年(1997年)8月、山梨県及び長野県の一部地域のインゲンマメ及びダイズ栽培ほ場で、我が国では未発生であったインゲンテントウの発生が確認された。その後山梨、長野両県による県内全域の発生調査の結果、山梨県では12市町村で、長野県では8市町村で確認されている。

本種は、メキシコ原産で北アメリカ、中央アメリカに分布しており、インゲンマメ、ダイズ等のマメ科植物を加害する害虫である。

成虫、幼虫とも葉裏を食害するが、成虫はしばしば葉の表面まで食い破り、幼虫は表皮を残す。成虫、幼虫ともに葉を食い尽くすと、新芽やつぼみ等も食害する。

アメリカ南部では年3～4世代を繰り返し、北

部では1世代である。また、成虫はマメ畑に近い森林などの落ち葉の下等で集団で越冬する。(生態等は本誌第19号参照)

発生地での被害は、インゲンマメ、ペニバナインゲン、ダイズ、ソラマメ及びササゲで認められており、薬剤防除が行われていない自家用菜園のインゲンマメの被害が目立っている。しかし、通常の薬剤防除が実施されているインゲンマメの経済栽培ほ場やダイズの自家用菜園及び経済栽培ほ場では、現在のところ被害はあまり発生していない。

防除対策としては、葉裏に卵塊やふ化幼虫を見つけたら速やかに取り除き、これを焼却したり埋没する。防除薬剤はシペルメトリン乳剤、CYAP乳剤、MEP乳剤、PAP乳剤等が有効であることが確認されているが農薬登録のための試験が関係県及び植物防疫所により実施されている。



インゲンマメの被害



インゲンテントウ成虫



インゲンテントウ 左: 蛹 右: 幼虫



インゲンテントウ卵

ハクサイダニ

学名: *Penthaleus erythrocephalus* Koch

近年、兵庫県・大阪府のハクサイ、シュンギク、ダイコン、カブ等で発生がみられた。

本種は、本州・九州の他に欧州に分布している。

成虫は、約1mmで背面に肛門があり水滴状の排泄物をつけていることが多い。本種はハシリダニ科に属し外部形態が、ムギダニ(本誌27号)に酷似するが寄生植物はハクサイ、ホウレンソウ等の各種野菜である。活動時期は晩秋～春で、年間1～2世代を経過し12～4月に楕円形で橙赤色の卵を産む。一部の卵はすぐに孵化し3月に成虫となり5月には死滅する。残りの卵は休眠状態となって越冬し、10～11月頃に孵化したあと11～12月に



島根県農業試験場 板垣紀夫氏提供

成虫となる。発生量は、12月と3月に多く、また、その年の気温と降雨量によって変動し、暖冬の年や小雨の場合は多発生となる。

被害は結球野菜では内部葉にまで及び被害葉は灰色から銀白色となりやがて萎凋枯死する。幼植物では激しい加害により欠株となることがある。

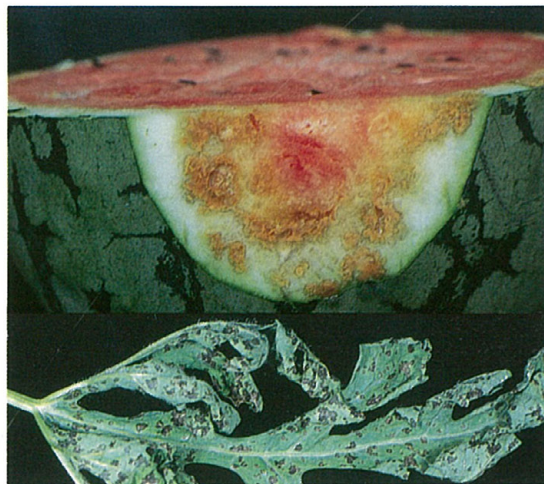
本種に対する登録薬剤はないが、PAP乳剤、カルタップ水溶剤が効果的であることが確認されている。また、他の害虫を対象に防除を行っているほ場での発生はほとんど認められていない。耕種的防除としては土中の夏期休眠卵に対するビニール被覆による蒸し込みが有効である。

スイカえそ斑点病

ウイルス名: メロンえそ斑点ウイルス (MNSV)

1989年鳥取県において、ユウガオ台スイカの内部果皮に黄褐色でスポンジ状のえそを伴う異常果が発生した。鳥取県園芸試験場が調査した結果、1996年にメロンえそ斑点ウイルス (melon necrotic spot virus) による病害であることが判明した。また、1996年には高知県のスイカでも発生が確認されている。

病徴は、果実では、果肉が水浸状となり、空洞を伴うことも多い。また、ハウス栽培の果実では、内部果皮部又は果肉部に黄褐色でスポンジ状のえそ塊が見られる。葉では、退緑小斑点、後にえそ斑点・葉脈えそになる。葉柄、巻きひげにもえそ



鳥取県園芸試験場 佐古 勇氏提供

が現れる。茎葉の症状は、主に5～6月のハウス栽培の株で現れる。

本病原ウイルスは、スイカ、ユウガオに容易に感染する。また、カボチャ(はやと、新土佐)、メロン(サンライズ)、キュウリ(久留米落合H)等の特定品種及びツルナにも感染するが、多くのウリ科植物には感染しない。第一次伝染源は発病植物、汚染土壌、汚染種子であり、土壌中の *Olpidium* 属菌が本ウイルスを媒介する。

防除対策は、収穫後の残さの埋没・焼却処分、土壌消毒、ウリ科作物以外の輪作の実施及び汚染ほ場からの雨水等の流入防止等である。